

合掌

## 「ニュートラルな姿勢」…中道の在り方

ネットニュースに「独で確認成功、STAP現象に再び関心」というニュースが出ていました。副題に「STAP現象の確認に成功、独有力大学が…。責任逃れした理研と早稲田大学の責任問われる」(文=大宅健一郎/ジャーナリスト)とありました。難しいことは置いておいて、ドイツのハイデルベルク大学が、小保方氏が成功したとするSTAP現象の再現に取り組み、試行錯誤の結果、独自に一定の成果を上げたということです。

「日本国内では、マスコミによる異常な偏向報道によって、完全に葬り去られたように印象づけられたSTAP現象だが、そのような先入観のない海外の大学によって再現実験が試みられた事実は大きい。」

と記されていました。そして、

「小保方氏人権を蹂躪するかのようなマスコミが作りあげた世論に同調し、常識を逸脱した禁じ手まで使って論文をなきものとして責任逃れをした理研や早稲田大学と比べ、真摯に生物学的現象を研究するハイデルベルク大学のニュートラルな姿勢は、科学に向き合う本来のあり方を教えてくれる。」

と続く。

STAP細胞についての顛末は、ご存知の通りです。小保方氏は、一躍時の人となりましたが、その後、論文に不正やSTAP現象自体が捏造であるとして、糾弾されることになります。そして、それと同時に、理研や大学など、それまで関係していた関係諸機関が、それまでのことを無かったこととしたいかのように、論文や博士号の取り消し、免職など、全てを否定していきました。自分たちの組織に都合の悪いことは、否定するというより、無かったこととしたい。そうすることで、自らの立場を守りたいということでしょうか。脚光を浴びているときはちやほやしておきながら、マイナスの面が表れてきたとたん、全否定に回る。その本質、つまり、彼女が取り組んだSTAP現象の有無自体の是非は関係ない。社会的に否定されていることは、組織内でも否定されるべきという一面的な判断によって、そのもの自身と向き合うことさえやめてしまうのです。自らのメンツを保つために、真実から目を背ける、いや、メンツの為には、真実などどうでもよい、そんな姿勢すら感じます。小保方氏の場合、理研によって、一定期間、再現実験の機会が与えられました。しかし、不正が無いように、厳しい監視下での実験です。もちろん、疑いがかけられているのですから、当たり前かもしれませんが、異常なまでの監視体制でした。しかし、再現実験は成功しませんでした。マスコミも、連日報道していましたが、それは、中立な立場、科学的な見地からのものではなく、全く興味本位のものという感じでした。こんな態度では、物事の本質は見えてきません。もちろん、小保方氏自身、大学の論文等に不正があったことは事実ですから、疑いの目を向けられても仕方ない。しかし、彼女が社会的に否定されたということと、STAP現象そのものが否定されることは同義ではないはずです。しかし、日本の社会では、それが行われ、その後研究そのものさえタブー視されてしまった。非常に日本的な現象だと言えます。東日本大震災時の、様々な風評被害も、こうした日本的な思考が影響している気がします。

今回の、ドイツのハイデルベルク大学による研究成果。完全なSTAP現象の再現ではないけれども、偏見や組織のしがらみに関係なく、純粋に科学的な見地からの取り組みがなされたということ、これこそ、今の日本に必要な“ものの見方考え方”と言えるのではないのでしょうか。

釈迦は、自らの悟りを弟子たちに初めて説いた「初転法輪」において、「中道」を示したと言われます。何事も極端にならず、調和のとれた在り方が大切だということです。これは、偏見を持たず、物事を「ニュートラル」な視点から捉え考えることを示していると思います。それこそが、真実を見定めていく在り方です。

結手